



ボイスをめぐる眼差し

筆者がヨーゼフ・ボイス（1921-1986）を写真集で知ったのは1980年代後半で、ボイスが来日した1984年の西武美術館での個展は見ていない。

1990年代後半にボイスを自分の研究対象と定めた頃、日本の現代美術シーンではアンゼルム・キーファー（西武美術館が建物内で移転・改称したセゾン美術館、および佐賀町エキジビット・スペースで1993年に個展があった）やジグマー・ポルケといった、デュッセルドルフ美術アカデミーでボイスが教授を務めていた時代に同校で学んでいた後継世代がすでにドイツの主要な現代作家であり、「今頃なぜボイス？」と周囲に言われたことを記憶している。

それでも90年代にはまだ（というべきか）、近現代美術を扱うドイツの美術館ならばボイス作品を所蔵・展示していることがある種のステータスであり、また、インスタレーションという形式を多用したボイスの作品は、サイトスペシフィックな展示のなされた各地の代表作を見て回ることが肝要である、と上の世代から教わった。ダルムシュタットをはじめ、バーゼル、ミュンヘン、メンヒェングラートバハ、クレーフェルト、シャフハウゼン、ベルリン、シュトゥットガルト、デュッセルドルフ、クラーネンブルク、デュイスブルク、ボン、等々。

いわば「ボイス詣で」の旅である。

ランド・アートとは異なる文脈で、作家の意図に叶おうとする聖域的な展示空間は個人美術館や個室型の作品でもしばしば見られるが、ボイスはむしろ公共空間としての美術館で自作が恒常に公開され、彼の「拡張された芸術概念」へと人々の意識を向け、挑発し続けることを意図した。彼にとって自作品は従来の美術品としての鑑賞対象であることを超えて、別種の概念を観照させるためのヴィークル（乗り物、容器）だからだ。しばしば複数のギャラリストやコレクターの協力を得て、ボイス（とミュージアム）は作品を集約し、独自の「ボイス室」を獲得した。

多種多様なマルティプルの制作もまた、複数のヴィークルとして多くの所有者に届き、ヴィトリーヌ（陳列ケース）やインスタレーションの空間においてボイス作品の集合体を容易に形成する手段といえる。アクション（と呼ばれたパフォーマンスや社会活動）や展覧会の一回性を補完するものとして、行為の残余物や展覧会の広報印刷物・図録類が（時には通常版以外の特別版として）エディション化された。多くのマルティプルは単体で存立しつつ、同時に相互文脈の内にある。

当然ながら、時の流れと共にボイスの受容／需要は変容する。ボイス没後に東西ドイツの分断も消失し、コレクターの没後により主要なコレクション（とその集積空間）が解体・再編されうる。美術館もまた閉館・開館・改修、あるいは所蔵品の史的再考にともない、展示の内容を変えていく。

「ボイスによるボイス」の消失と変容は、むろん彼には織り込み済みであっただろう。玄武岩の石柱と一対で植樹するドクメンタ7のプロジェクト《7000本の櫻の木》（1982-87）のように、万物は変化する。1960年代初頭にナムジュン・パイクやジョージ・マチューナスと出会い、以後のアクションや個展にたびたびその名を冠し、1965年からマルティプルを手がけたように、「絶え間ない流動」を表すフルクサスの語は、60年代を通してボイスの信条ともなった。良かれ悪しかれ、ボイスは新たな他者の作品とともに新たな場におかれ、新たな来場者に発見される。



GALLERY
TAGA 2

一之瀬ちひろが「ボイス以後のボイス」を含めて「ボイスの場」(Beuys-Raum)をめぐり、「ボイス以外」の光景とともに場の記憶を呼び起こすことは、ボイスのマルティプルを収めるヴィトリーヌのガラスを筆者に想起させる。ヴィトリーヌのガラスはケース内の事物を保持し、透かし見せながら、ガラスに映り込んだ背後の世界を意識に上らせる。映り込む世界、異なりながらも同じ展示の場、同じカセット（小箱）に集積されたイメージを、我々はそれぞれの時間のなかで読み解き、記憶し、連想する。

ボイス最初の大規模な回顧展「並行過程」(1967年、メンヒェングラートバハ市立美術館)の図録は、厚紙の被せ箱(20×16×厚3cm)に複数の印刷物やオブジェを収めたマルティプルとして彼のマルティプルのカタログ・レゾネに第5番として記載されている。素材・技法の作品情報は、カタログボックス(20×16×3cm)に油性塗料(ブラウンクロイツ)で刻印されたフェルト(19.5×15.5×1cm)、蛇腹折シート2点、ブックレット。

一之瀬が本展で作成した刊行物をボイスとの親縁性において読む。端的になぞらえるならば、ボイスを特徴づける「ブラウンクロイツで刻印されたフェルト」に当たるのが彼女の論考ではないだろうか、と考える。考えてすぐ、そもそも彼女が写真家であり、収められたイメージの断片も彼女の作品であり、作品の図版であると思い直す。論考=思索をエディション化し、イメージの断片とともにケースに収め、ケースから取り出したそれらを空間に再度配置すること。一之瀬が自在とするその手腕こそが、ボイスとの共通点であり、ボイスからの出発点だと思う。

三本松 倫代（さんぽんまつ・ともよ）／神奈川県立近代美術館 主任学芸員